

## 多様な教育機関から実習を受け入れている立場から

佐々木 菜名代

川崎市立多摩病院（以下、当院）は、川崎市が設置し、指定管理者として学校法人聖マリアンナ医科大学が運営を行っている376床の地域医療支援病院である。当院では2006年の開院時より、看護学生の実習を受け入れているが、2014年度には9校から延べ308人の実習生を受け入れた。その内訳は、看護系大学3校、看護系短期大学1校、看護師養成所〈3年課程〉3校、看護師養成所〈2年課程〉1校、准看護師養成所1校と多岐に渡る（表1）。

異なる教育課程の実習を受け入れていることから、同じ科目であっても、その実習目的・目標、スケジュールは多種多様である。そのような状況のなかで、実習生が実習の目的を達成し、少しでも有意義な実習となるようにさまざまな工夫をし、受け入れを行っている。年間を通し、もっとも多くの実習生を受け入れている産婦人科病棟を例に実習調整の実際や、実習受け入れに際し、工夫している点などを紹介したい。

当院の産婦人科病棟は30床の混合病棟で、4床室が6室、個室5床、LDR（Labor Delivery Recovery；陣痛分娩室）1床があり、年間350～400件の分娩がある。年間を通し、6校からの実習を受け入れている（表2）。実習期間を決定するにあたっては、受け持ち患者の選定や指導体制の充実のため、できる限り、同時期に複数校が重ならないように調整を行っている。しかし、調整がむずかしく、実習が重なってしまった場合は、グループの学生数の調整や実習スケジュールの調整を依頼している。

表3は、A大学とE看専の5～7月にかけての実習スケジュールを示しているが、実習が重なる5～6月ではE看専のグループ人数は3～4人とし、重ならない時期には5人としている。A大学に関しても、実習校が重ならない時期には、1グループの人数を4人としているところもある。また、E看専は3週間の実習のうち、1週目に外来や病院以外の施設での実習を行っているが、調整可能な場合には病棟外での実習を3週目とし、病棟での実習におけるA大学との重複期間を減らすように調整を依頼している（表3・6/1～6/19参照）。

分娩への立ち会いに関しても、実習期間を加味し優先順位をつけながら、各校が平等に、そしてできるだけ多

くの学生がそのチャンスを得られるように調整を行っている。たとえば、表3のように同時期に2校が実習に来ている場合、E看専の学生は2週間病棟での実習を行うが、A大学の学生は1週間しか病棟での実習を行わないため、5月18日から22日の週で分娩がある場合は、A大学の学生を優先させる。場合によっては、双方の教員同士で話し合いをしてもらい、学生の学習状況の進捗具合などから、分娩に立ち会う学生を決定してもらったり、複数の学生がつき添うことに対して産婦の了承が得られれば、双方の学校から1人ずつ学生が立ち会う、といった方法をとっている。

また、病棟の実習指導者（以下、指導者）は、それぞれの学校の実習目標を踏まえて、その目標が達成できるように患者選定やカンファレンス、学生の行動調整を行っている。実習期間に合わせて少しでも継続して患者を受け持てるように調整を実施し、それぞれの学校が重要視している内容を踏まえて学生とかかわる努力をしている。学校が重要視している内容もそれぞれであり、できるだけ数多くの手技、処置の見学、体験をすることを重視する学校があれば、看護過程の展開を最重視している学校もある。

実習校が限定的だったころは、実習を通して学生に、「こんな看護師になりたい」と思ってもらえるような、ロールモデルとしての姿をみせることができればよいと考え、指導者の看護観に基づいた指導を行ってきたという印象があった。それは、学校側の実習目標等を無視していたということではなく、同一の実習校が何クールも実習に来る状況では、実習の目的・目標も改めて要項等をみなくても、経験的に理解でき、それに合わせた指導が行っていた状況であったといえる。しかし、現在は、実習校、実習生は当院の顧客であるという視点を持ち、顧客のニーズを満たすこと、すなわち「実習目的・目標の達成」を最優先と考え、新たな実習校が来るたびに、実習要項に立ち返りながら、学校の特徴をきちんと踏まえていく必要があると考えている。

学校側のニーズを満たし、学生にとっても有意義な実習にするためには、臨床指導者と教員とのコミュニケーションが重要である。実習中は、教員と指導者が情報交換を密に行い、とくに気になる学生がいる際には、進捗状況や対処について連携を深めるように努力している。

表1 平成26年度実習受け入れ実績

	校数	学生数(延べ)
看護系大学	3	70
看護系短期大学	1	96
看護師養成所 (3年課程)	3	48
看護師養成所 (2年課程)	1	54
准看護師養成所	1	40
合計	9	308

表2 当院における母性看護領域実習概要

学校	実習名	実習目的	実習年度	実習期間
A 大学	母性生涯発達看護学実習	妊・産・褥婦・新生児および家族の特性を理解し、看護実践・健康教育に参加することで、母子の援助に必要な基本的能力を養う	3年次 4年次	3週間 *病棟での実習は2週間
B 大学	母性発達援助実践	周産期にある女性と子ども・家族の心身の変化・ニーズ・適応過程・発達課題を理解し、個別的な看護が実践できる基本的能力を養う。また、周産期にある女性と子ども・家族にかかわることによって、人間の生涯を通じた発達促進と健康増進のための援助の方向性を考察する	2年次	4週間 *病棟での実習は毎水・木曜日
C 短期大学	母性看護学実習	妊娠・分娩・産褥期における母性の特徴を理解し、母子とその家族に必要な看護の基礎的能力を習得する	3年次	2週間
E 看護専門学校	母性看護学実習	母性の特性を理解し、対象に必要な看護を学ぶ	3年次	3週間 *病棟での実習は2週間
F 看護専門学校	母性看護学実習	女性のライフサイクルをリプロダクティブヘルス/ライツの視点からとらえ、母子および家族の健康保持・増進・回復のために必要な援助を学ぶ	3年次	3週間
G 看護高等専修学校	母性看護実習 (見学実習)	妊娠・分娩・産褥・新生児期の心身の変化を知る	2年次	2日間

表3 母性実習における実習調整例

学校名	5月			6月					7月
	11-15	18-22	25-29	1-5	8-12	15-19	22-26	29-3	6-10
A 大学	学	③	③	学	③	③			
	内			内					
E 看専	④			③			⑤		
	外来	病棟		病棟		外来	外来	病棟	

注：○内の数字は学生数

当初は教員に対して気後れするなどして、なかなか対等に意見交換ができない指導者も多かったが、実習校との実習前後の打ち合わせに指導者が参加できるように勤務調整し、教育担当者がサポートしながら、直接教員と意見交換する機会をもつようにしてきたことで、最近では

指導者が主体的に教員とコミュニケーションを図れるようになってきている。

当院では、主任および各部署で選任された臨床指導者が実習生の指導にあっているが、現在院内にいる24人の実習指導者のうち、厚生労働省の定める「実習指導者

研修」の受講修了者は8人とまだまだ少ない。本院としては、積極的に「実習指導者研修」へ職員を派遣し、体系的な教育を受けた指導者を増やしていきたいと考えているが、受け入れ機関の問題等もあるため、現状では院内における教育が主体となっている。

まず、新任の指導者に対しては、「実習教育の法的位置づけ」「看護基礎教育カリキュラムについて」「実習教育の目的」「実習指導者の役割」「成人教育（成人学習）とは」といった内容の集合研修を行い、実習を取り巻く環境の理解に努めている。また、毎月開催される主任会において、各部署での実習指導状況の把握や、事例を共有し、意見交換をすることで、指導観の育成に努めている。さらに、各部署では、新任の指導者に対し、先輩の指導者が、実習校の特徴を踏まえたオリエンテーションを実施している。具体的な学生への指導方法だけでなく、教育課程や実習時の学年による学生のレディネスの違い、実習スケジュールによる実習の進行度の違い、各校の実習内容の特徴などを伝えることで、新任指導者の戸惑いを軽減し、学校のニーズに合わせた指導を行えるようにしている。

各校の実習目的・目標に合わせた指導を行うことで、実習のゴール設定を行うことが容易になった半面、指導者が新たに感じるようになったジレンマもある。実習の到達目標のレベルは、学校によって差があり、部署で新人看護師ともかかわっている指導者のなかには、「実習での到達目標の低さが現場との乖離を招き、就職した際

のリアリティショックにつながるのではないかと感じている者もいる。

現行の看護基礎教育システムや看護教育に関する課題についての理解を深めることだけでなく、主任・臨床指導者合同での学習会（月1回開催）では、指導場面の再構成、リフレクション、コーチングといったテーマに取り組み、新たなスキルの獲得により指導力を向上させ、限られた条件のなかで最大限のかかわりができるようにすることで、ジレンマの解消に努めているところである。

また、ジレンマの解消においても、教員とのコミュニケーションは重要である。現在では、実習に対する疑問や納得がいかないことがあれば、実習指導者から直接教員に確認をし、実習の進捗状況についての把握や調整ができるようになったことで、指導者からも、「教員と話すことで、状況は変わらなくても、意見を聞いてもらえることにより、自分の考えがズレていないことが確認できれば安心する」「学生、実習指導者、教員の3者で実習が進んでいるという感じがする」といった意見が聞かれている。

今後は、実習校の教員と卒業生に関する情報交換を行うなどしながら、看護専門職者の育成という視点で実習指導について検討していきたいと考えている。実習を点としてとらえるのではなく、看護職として一人前になるまでの通過点としてとらえたうえで、基礎教育における実習でどのような連携が図れるか検討し、実習指導に反映させていきたい。